

# 緑の海

まほろば主人 宮下 周平

(仁木農場より)

みどりのうみ

ある朝、ふと目を覚ます。

すると、緑の畑から、「おいで、おいで……」と呼ばれているような声を聞いた。

何と、そこは浄土極楽の宝珠の池で、満開の蓮の華が常世の春とばかり咲き乱れている。

仁木のこの自然農園。

作物が「うれしいな、うれしいな……」と言いながら、枝や葉を思いつきり伸びたいだけ伸ばし、広げたいだけ広げている。

何処までも何処までも伸び切る。

それは、もう嬉しくて、嬉しくて、植物たちが、歓喜の声を挙げながら、生長してゆく。その現場を目の当たりに見て、私の今までの農業観が一変してしまった。

何ということだろう。何という光景だろう。

作物が喜々として育ってゆく在り様は、この世のものではなかった。まさに『緑の海』なのだ。

どこまでも続く海が、この畑に出現した、とさえ思われた。そのうねりは、法の海。

いのちはみな一つという海、「イノチの海」なのだ。

もう、命の歓喜の合唱が、四方八方に木霊している。

これが、植物の本性というものだろう。

私は、何をしていたのだろう。

何を思い違っていたのだろう。

植物が咲きたいように咲かす、育ちたいように育てる。

これは、何であろうか。素人の私には分からない。

しかし、明らかに今までとは違う世界が開かれた気がした。

〇〇農法、〇〇栽培という技術や考え方は、あくまでもこちら側、人間の立場から見た視点で、植物にとつては、何か全く別次元・別世界のことではないかと思った。

何かのタガを外す、何かの縛りを外すことが、人の務めではなからうかと、フト思った。

農薬を撒こうが、慣行であろうが、有機や自然の農法でしようが、こことく全てのイノチが育つてゆくその大自然の命の営みの大きさと深さ、見事に感動している。

イノチ丸ごとお抱えの、大自然の息吹の偉大さは言葉にならない。ああだ、こうだ、という以前に、人は謙虚にならねばならないと思った。刻一刻、イノチは紡がれ伸びてゆく、何処までも伸びてゆく。こんな感動がどの世界にあるだろうか。もうスゴイの一言しかない。

生きたくて生きたくて、伸びたくて伸びたくて、生まれたくて生まれたくて、そんな思いの萌芽を、植物すべてが持っている、そして人もみんな持っている、世界がすべて持っている、この地球も宇宙もすべて、無限の彼方に生きようと伸びようとしているのだ。

それが、自然の好生の徳というもの。すべてが生きることの喜び、輝き、閃きがキラキラしてこそ、この世であり、あの世であり、この世もあの世も区別できないほど素晴らしいのだ。

入植して数か月のわずかの間、あまり大きなことは言えないが、何て知らなかったのだろう、と正直思った。

人は、土から生まれ土に帰るといいうが、やはり誰もが生きていく限り、土に生きるべきなのだ、と思った。



自然食品店を30年やって、自然に触れているようだが、全然分かっていなかった。

今も本当は分かっていないのだろう。しかし、何か明らかに違うのだ。

自然と生きるということ、植物と共に生きるということは、何か素に戻れる、巣に戻れる自分がいるのだ。

幸せや希望や何もかもが、このしっかりした大地からしか、本物は生まれぬような気がした。

ある朝、早く畑に行くと、キャベツ畑にモンシロチョウが、それは夥しい数で乱舞している。

毎年、小別沢の畑でもよく見る光景であったが、その数が並ではないのだ。

びっくりして、これはこの世の出来事か！と思うほど強烈であった。

今の畑では、蝶々も飛ばなくなった、といわれて久しい。

むしろ農薬のせいであろう。

しかし、蝶々とは、本来こういう本性であったのか、と思わせるほど、凄かった。

それは、あのかぼちゃ畑の「うれしくて、うれしくて」と同じ思いで、飛んでいたのだ。それはもう喜々として、そのイノチをイノチが飛んでいるのだ。

そのイノチのまま、飛ぶようにして飛んでいるのだ。何にも侵されることなく、誰にも怯えることなく、もう喜び一杯で舞っているのだ。

きつと、モンシロチョウは悔いのない一生を終えることだろう。

# 海の緑

このとき初めてあの良寛さまの詩『花無心』が思い出された。

「花 無心にして 蝶を招き、 蝶 無心にして 花を訪ぬ。

花 開くとき 蝶来たり、 蝶 来るとき 花開く。

吾もまた 人を知らず。 人もまた 吾を知らず。

知らずして 帝則に従う。」

…… 花は、蝶を招こうとして咲いているのではなく。

蝶に、花を訪ねようという心があるのでもない。

花が咲くと、蝶が飛んできて、蝶が飛んでくる時に花が咲いている。

自分も、他の人々のことは知らないが、他の人々も自分のことを知らない。

互いに知らないながら、天地の道理に従って生きている ……

その通りだと、思われた。

ただ、みな無心なのだ。それで、いいのだ。

お陰で、キャベツの葉っぱは、ボロボロのレース状態。

でも、キャベツも嬉しそうだった。楽しそうだった。

お互い「キャッキヤ」と、笑っているのだ。

こんな光景があるものだろうか、と思われた。

大丈夫、たくさん青虫に食べられ、与えた後に、

「よし、ドッコイしょ」と、これから寒さに向

かって葉を巻き始めるのだ。

これからが、自分の世界だとばかりに。

昆虫も植物もお互い分け合って生きて

いる。

本当に共存共生しているのだ。

それは、まるで極楽の天上のように、

他に与えるだけで自分が清まっていく、

キラキラと煌く世界だった。すばらしかった。

何十年も、妻がジャガイモの種を更新して

毎年、植えている。豆とトマトの。パイプの間に、

チョコッと植えた。それは、機械撒きの試しで、

試運転であった。完全な失敗である。蛇行し

て恥ずかしい限りである。畝幅、条間の失敗

か。培土が叶わず、茂るに任せるのみだった。

その代わり、成りは恐ろしいくらいになった。

元肥のたい肥が効いたのだろう。しかし、あの一カ月前の集中豪雨

で葉と莖が倒れてしまった。無残であった。

しかし、致し方ない。枯れた根を掘り、幾分小さめの芋（キタア

カリ）を掘ってふかして試食した。

その時、余りのきめ細やかさと味わいの深さに、突き抜けた感動に、

驚いた自分がいた。

これが、芋の美味しさというものか。もう、自分ながら作物にこれ

ほど、感動したことがあっただろうか、と思うほどだった。

あの植物たちの声、姿を見ると、この味もまた、植物たちのイノチ

の現れ、喜びそのものであったのかと、改めて思った。

味もイノチをそのまま映す。天恵のこの地

の良さに感謝し、0・1テストで対話するこ

とに感謝して、ただ大地と植物に奉仕する後

半生の自分たち。

5月2日に、土地を収得して、初めは通い

で畑への往復、機械類を入れても初めての運

転、海のものとも山のものとも覚束ない状態



# 緑の海

で畑起こしを始めたのは、半ば過ぎだったか。まだ、100日が経ったかどうか。4.5haの広大な地で、親子3人が耕作できるのは、今の処、半分にも満たない。しかし、この8月初めから末までの丸一ヶ月で、半町歩の畑から総量2.5トンもの信じられない量の果菜類が出荷できた。

昨日は、観測史上にない大型台風が襲来するというので必死に収穫、10kgの発泡に32箱も出荷。

しかし、祈りが届いたのか、台風は幸いに来なかった。今年何度重なる台風のほとんどが、一度もこの地に近寄らなかったのも不思議だ。

明け方、キリギリスやコウロギなどの虫たちの大合唱で目が覚めた。それは、地鳴りというか地響きするような唸りが、畑一杯空一杯から聞こえてくるのだ。家の中に入って鳴くコウロギを家内が外に出したのは夜中2時過ぎだった。それからというものは、この昆虫たちが、「台風よ、来ないでー」とでも、泣き叫んだお陰なのかと思わせるほどだった。そして、静かに去った台風に「ありがとう!!

ありがとう!!」と感謝の声、喜びの声だったのかとも取れる大合唱だったのだ。それは凄まじいばかりだった。そして、その声々はみんな違って、実に豊かで大きく美しかった。この世の音楽ではない天上のオーケストラで、我が一生の内、一番感動した演奏会だった。

その時、「ああ!ここは私たちの畑でない。みんなのもの、生けるイノチのみんなのものなんだ!」と知ったのだ。イノチがみんな協力して作っている畑なんだ、と確信した。何故、こんなにも一杯一杯採れるのだろうか、なぜこゝも美味しく豊かになるのだろうか、ということが理解できた。それは、みんなと生きていくという喜びだったからだ。これが唯一の答えだった。

毎日、イノチたちと向き合いながら、みなと共有共働できる日を夢見ながら、今日も収穫に世話に明け暮れる自分たちである。しかし今、文章は合間を縫って、やっとのことで書いている。

半農半Xのつもりが甘い甘い、「晴耕雨読」どころか、「晴雨耕々」で一日とて休めない、全農でも追いつかない、きつい毎日を過ごしている。でも、「堪えるな」と思っている、畑に出れば、作物たちに励まされてファイトが出てくる。

茨城大学農学部の中島紀一名誉教授にこのことを伝えたら、呆れられた。

「それは、20年遅いヨ。遅くても40代後半までに就農しなければ、無理ですよ!ハッハッハ!」

その無理を無理と知って、65歳と70歳からの二人の人生のやり直し。

これからどうなるか植物に任せ、イノチのままに、蝶のように、花のように、無心に生きることになりました。

本当に、作物や昆虫たちが一番知っているのですよ。

小さい私たちの先生ですから……。

